

# 都市に住むために —住宅設計を通して見た住環境—

高田典夫

生活環境学科 建築デザイン研究室

Living in the City Considering of Living Environment from Housing Design

Norio TAKATA  
Department of Human Environmental Sciences

Key words : Living collectively 集まって住む, Space in the city 街のすきま, Glimpse in the city 視線のぬけ, Context of the site 敷地を読む

## はじめに

「住めば都」という言葉がある。「住み慣れればどんな僻地でも環境でもそれなりにすみよくなる」ということであるが、人はその環境に合わせて暮らすことが出来るということでもある。

人が住む器である住宅は、それだけで成り立っているわけではない。住宅を取り巻く環境も重要な要素となっている。それらを全てふくめて「住環境」ということができる。

住めば都は、その住環境が人に及ぼす影響について述べられていることと言える。

自然環境がおおらかに存在している中で暮らすことは、周辺との関係を色濃く反映させなくても住環境としてなりたつことがある。都市に住むということは、その周辺環境との関係をもっと密に考えなければならなくなる状況といえる。

都市に住むためには、そこに住むための知恵を周辺環境から抽出しなければならない。

いくつかの住宅設計を通して、都市に住むために検討・考察するポイントが見えてきた。

## 50年前の東京の住まい

図1に示すスケッチは、東京都文京区小日向にあった、筆者が50年ほど前に暮らしていた住宅を記憶に基づいて起こしたものである。庭先に建つ離れは子供

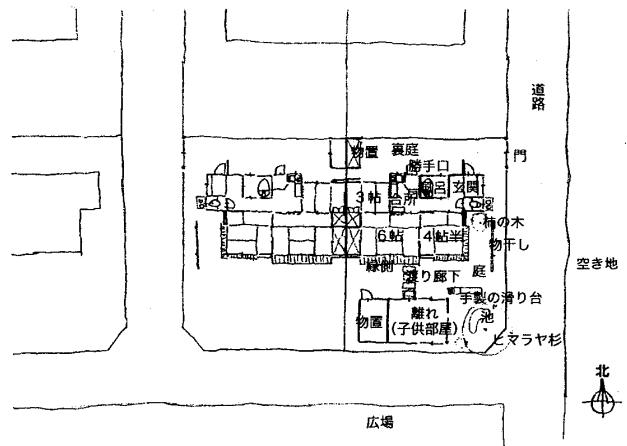


図1 50年前の東京のすまい

たちが大きくなって勉強部屋を確保するために増築したものであるから、基本プランは、不動産広告的に言えば「3Kの棟割り長屋」ということになる。ここに1950年代から約20年間家族5人で暮らしていた。生活空間としては極限的にまで小さいと言えるこの住宅に思春期の子供3人が高校生になるまで暮らしていたという事実、今日の都市における住環境を考えるヒントが隠されている。

もちろん、1部屋とはいえ増築可能な庭があったという敷地の広さは重要なことである。が、これをふくめて生活そのものが周辺の環境をふくめて成り立っていたということがその一番大きな要因であったと思わ

れる。この住宅のある敷地は襷のように張り出している武蔵野台地の先端の一つに位置している（図2）。台地から音羽の谷に続く崖地は子どもたちにとっての格好の遊び場ともなっていて、住環境を構成する大きな要因ともなっていた。プライベート／パブリックという線が引ききれない生活環境の存在がこの生活を可能にしていると考えられる。いわば、生活のなかのある部分が住宅内部にとどまらず、外部空間にまで拡張していたということがいえるのである。

この住環境での生活が「原風景」となっている筆者が計画した新しい都市居住形態（図3）を事例として取り上げ、都市と住環境の在り方を探っていく。

### 敷地を読む

計画敷地は、東京の中で成熟した住宅地の一つといえる世田谷区上馬にある。この敷地を中心とした航空

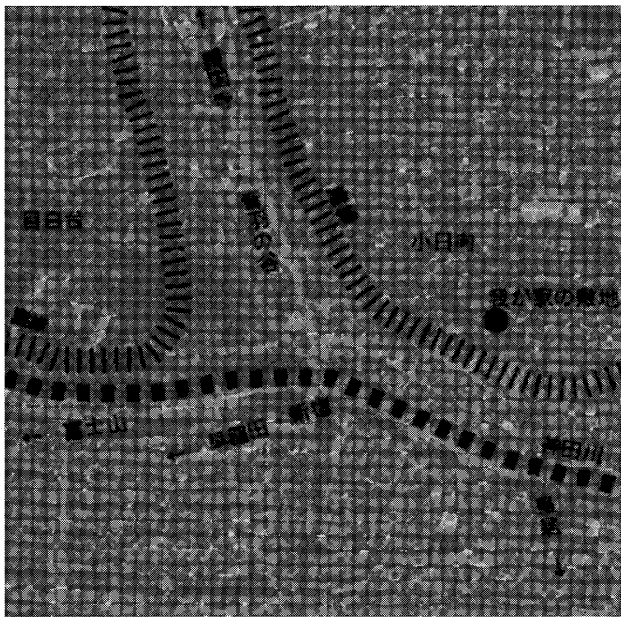


図2 すまいを取り巻く環境

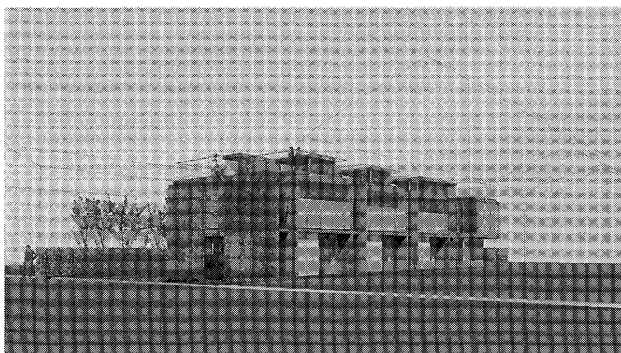


図3 上馬に建つタウンハウス

写真を一辺が2キロメートルに切り取ってある（図4）。周辺には駒沢公園・駒澤大学をはじめとするロットの大きな公共空間があることが読み取れるが、全体としてみれば、すきまのほとんどない、都市の稠密な住宅地ということがわかる。

一辺を1キロメートルに拡大してみると（図5）敷地を取り巻く道路の構成が見えてくる。環状七号・国道246号といった幹線道路にも隣接する便利な住宅地といえる。

さらにスケールをあげて敷地によってみよう。

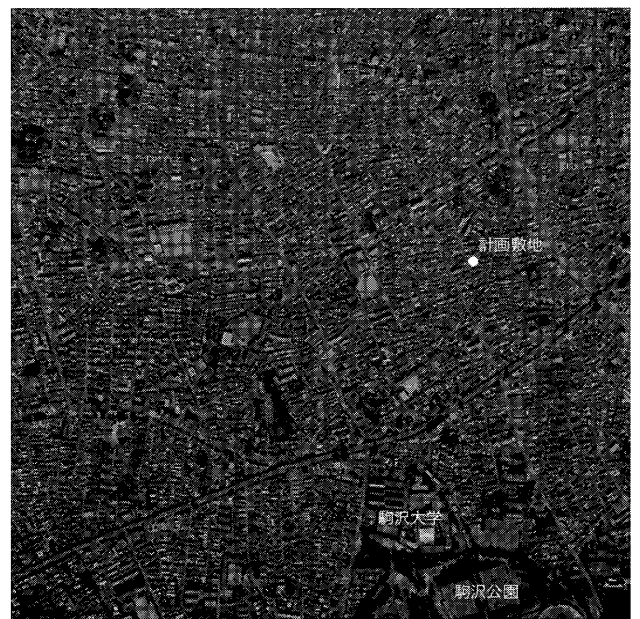


図4 2000 m 四方の街

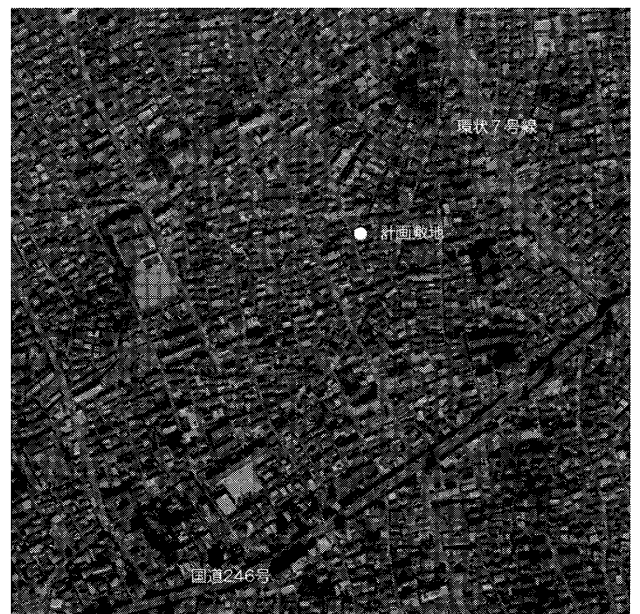


図5 1000 m 四方の街

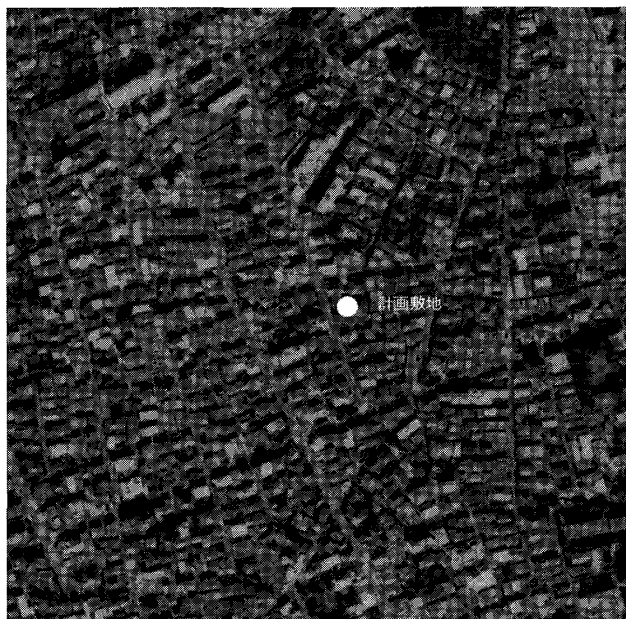


図 6 500 m 四方の街

一辺が 500 メートルの航空写真（図 6）になると、敷地周辺のそれぞれの住宅地のかたちも見るようになる。道路の構成から見える街の成り立ちを読み取ることが出来る。計画された道路網と、旧来からあったと思われる路・水路などがからみ合っ、生活空間をつくり出している。

航空写真では、土地の高低差まではわからないが、この街路の構成と土地のアンジュレーションが、住宅地としての豊かさをつくり出していたと考えられる。このように敷地を鳥のように観察することはなかなか容易には出来ない。敷地周辺の街路を歩き回り、地図を読み解き、敷地からまわりの環境を観察することからその敷地の持っている力を見いだすのである。

空間のデザインは、まずはその敷地そのものや敷地が置かれている環境を読み解くことから始まる。都市に住むということは、そのとなりに何かがあるということである。そのまたとなりに何かがある。その何かから受ける影響、またはその何かに与える影響を考えること、それが「敷地を読む」という作業である。

### 土地の記憶の保存と継承

この計画において、その作業の中から抽出したポイントの一つは、「土地の記憶の保存と継承」ということである。言い換えれば、まちなみの顔をうけつぐと

いうことである。この敷地周辺は、良好な住宅地ではあるが、特に突出した特徴があるという街ではない。その中で計画地に存在していた緑はこの街並みに潤いを与えていた（図 7）（図 8）。土地の記憶となっている前面道路沿いの緑のイメージを出来る限り保存し、継承することがこの計画のベースになっている。

街が時代と共に変化していくことは、ある意味で言えば仕方のないことかもしれないが、その街の持っている基本的な力を替えてしまうような変化は、少なくとも熟成された住宅地には似つかわしくないものだと考える。時代と共に変化していく街の中で残さなければいけないものを捉えることが、敷地を読むということであり、そのことが計画の始まりとなる。

この計画においては、先行した解体工事によって、既存の緑を何らかのかたちで残すという計画に立ち戻ることは出来なかった。そこで取った手法が「イメー

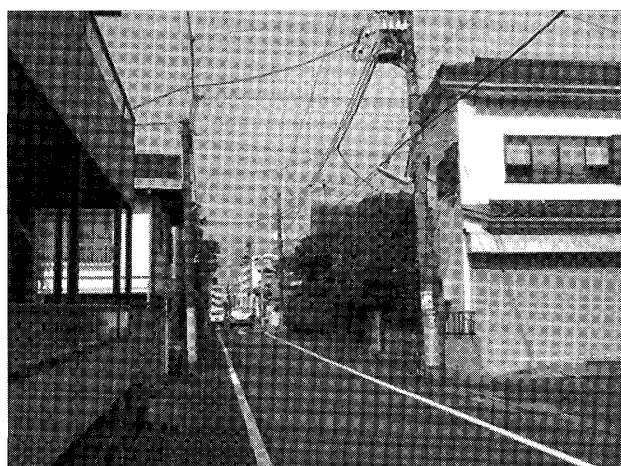


図 7 街路に面した計画地の緑



図 8 街並みの中で存在感のある緑

ジの保存」である。

既存の道路沿いの緑のイメージを新しい計画において新たな緑として配することで土地の記憶を継承している（図9）。

### 景色をつかみ取る

敷地から読み取った二つめのポイントは、「屋根越し広がる景色をつかみ取る」ということである。第1種低層住宅専用地域のこの計画地周辺は高さのほぼそろった屋根が連なっている。その屋根より少し高いレベルからは遠くの景観を見渡すことが出来る。屋根の上にはのびのびとまわりの屋根越しに遠くの景色、ソラが360°見渡すことが出来る（図10）。限られた容積率において屋上はもっとも魅力的な外の部屋となる。この外の部屋を「ルーム・ソラ」と名付けた（図11）。この計画における新しい居住形態の提案の一つである。

### 自然をつかみ取る

日本の伝統的な住空間は外部とのつながりが重要な

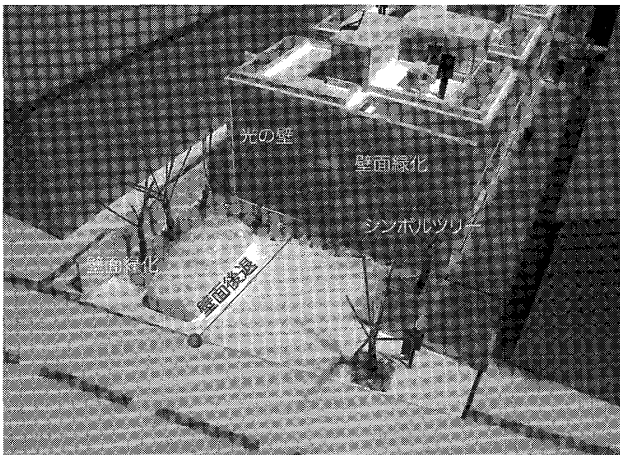


図9 イメージの保存～街並みと緑

要素であった。現代の都市住宅はどうだろうか。いろいろな制約から、自然を取り込んだ計画が都市においては難しくなっているのは事実かも知れない。また、機械による空間制御技術が発達したことにより、1年中変わらない環境で生活することも可能になっている。しかし、そのことによる弊害はつげとなつて次世代にまで影響を及ぼすことになっている。

その一つが地球温暖化という現象である。その現象が全て我々の住環境から起こっていることではないことは充分承知しているが、少しでもそのことに答えられる計画がなされるべきであろうと考える。

そこでこの計画においては、限られた狭い土地でも自然を取り込み、感じられる住まいを提案している。各住戸のフロンテージを確保しながら、住戸をずらして配置することにより、常に各住戸に光が入り、風が抜ける住まいになっている（図12）。つまり、「すきま」と「ぬけ」を活用した住環境の提案である（図13）。敷地を読むことから見つけ出した「街のすきま」と「視線のぬけ」を計画敷地内にとりこんで、自然に対応できる「すきま」と「ぬけ」というかたちに移し替えている。

### 住戸の設計

住宅の設計は、個々に異なる住み手にあわせた特殊解を探す作業ということができる。あらゆる人に対応可能な一般解としての住宅はありえない。そこで暮らす人が異なることにより、その住環境で起こりうる暮らしが全て同じとなることがないからである。

だれにでも暮らしやすい住宅を追求している住宅メーカーや、建て売り住宅、分譲マンションなどは、一般解に近いものかもしれないが、住まい手となった人はその空間に合わせて何らかの微調整～空間としての微調整もありえるし、住まい手の生活の微調整もあ

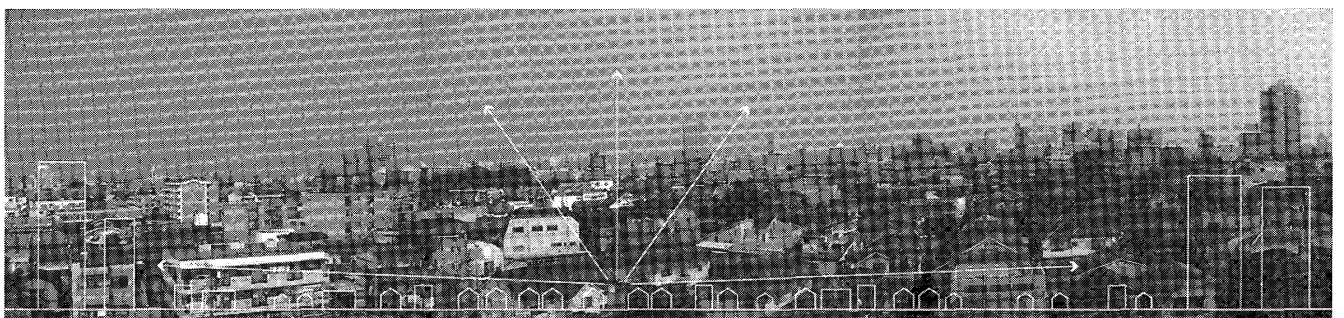


図10 屋根越しにつかみ取る景色

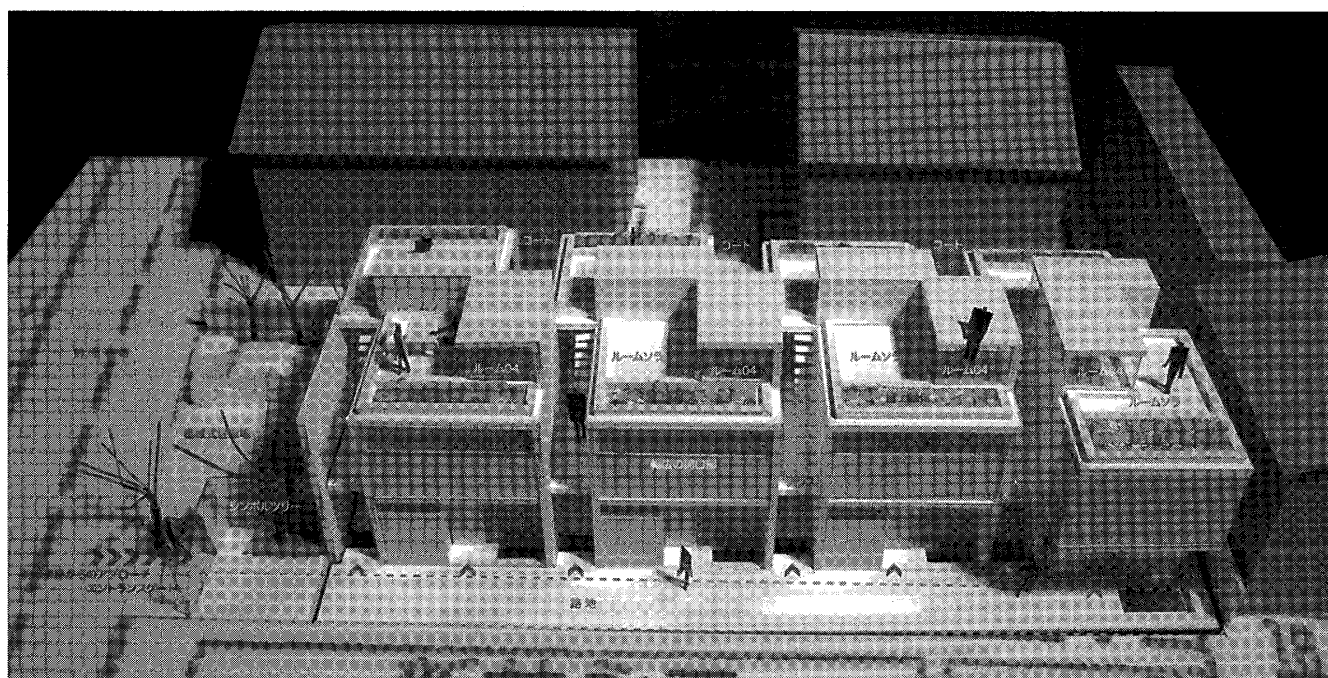


図 11 「ルーム・ソラ」～計画案を俯瞰する

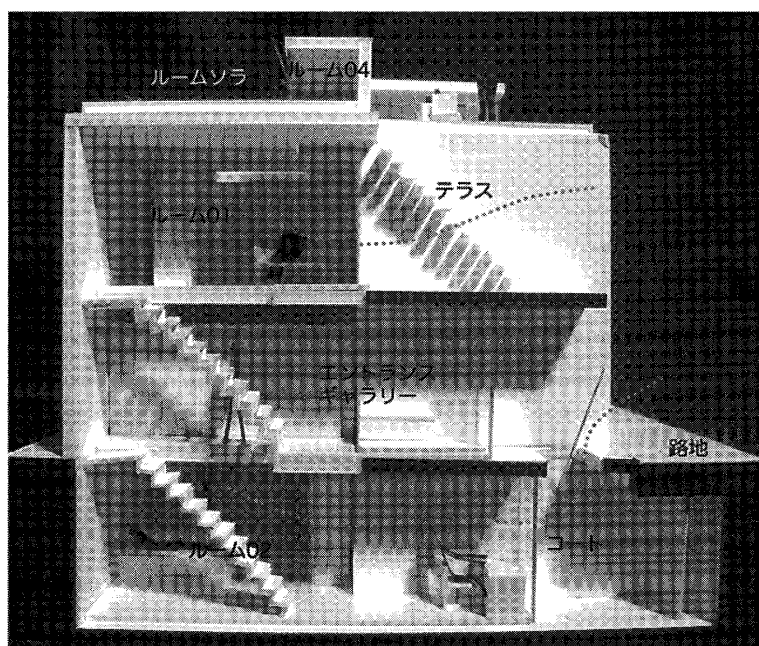


図 12 光が入り、風が抜けるすまい

りえる～をすることになる。この計画も実はその一般解を提示することが求められた計画であった。

本来住宅というものは、その環境・その人・そのコミュニティによって支えられている。その環境は、敷地を読む作業から始まることはすでに述べている。分譲住宅の場合、「その人」「そのコミュニティ」をいかにして決めればいいのかであろうか。

今回の計画においては、「その人」が選ぶことの出来るさまざまな空間を住戸の中に用意して、空間が生活を規定しないような試みをしている。そのために、全ての住戸が4つのフロアを確保するということを基本的に考えている(図14)。どのフロアに身を置くかによって体験できる空間は全く違って来る。このような体験は、住む人に広さ以上の豊かさを与えてくれる。

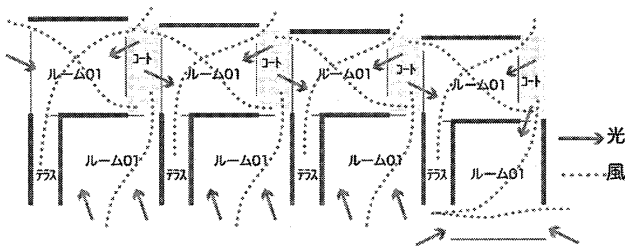
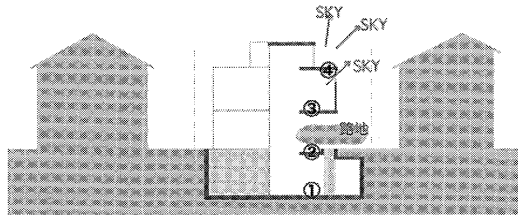


図13 「すきま」と「ぬけ」



- ④：もっとも開放的なフロアです。
- ③：非常に明るいフロアです。フロアからは空がよく見えます。
- ②：路地と一体的に利用できます。
- ①：地下独特の静かな部屋光も差し込んできます

図14 さまざまな空間を重ねた空間構成

それと同時に、重なり合う異なった空間が、固定しない生活を過ごすことを可能にしている（図15）。

この住まいには「大きなへや」（図16）（図17）「小さなへや」（図18）「いろんなへや」（図19）（図20）が用意されている。生活を規定しない空間がそのようなさまざまな形態を取ることを可能にしている。住む人はその時の気分や生活の仕方によって居場所を選ぶことができる。このような住まい方が生活の豊かさをもたらすと考えられる。

人の居場所にはそれぞれ名前がつけられている。居間・食堂・キッチン・玄関・浴室・洗面所・便所・納戸・押入れ・収納・ユーティリティ・庭・テラス・ベランダ・アプローチ・ポーチ・屋上など、果たしてその名前は生活空間を表していると言えるのであろうか。室名をつけることができない空間が、多様な生活を演出できる空間とも言える。そこで生活が営まれることにより空間の室が変化し、ある特定の生活が固定化して室名が発生することになるかもしれない。この計画においても、記号としての室名はつけてあるが、住まい手の生活が始まったときにその名前は変わっていくと考えている。

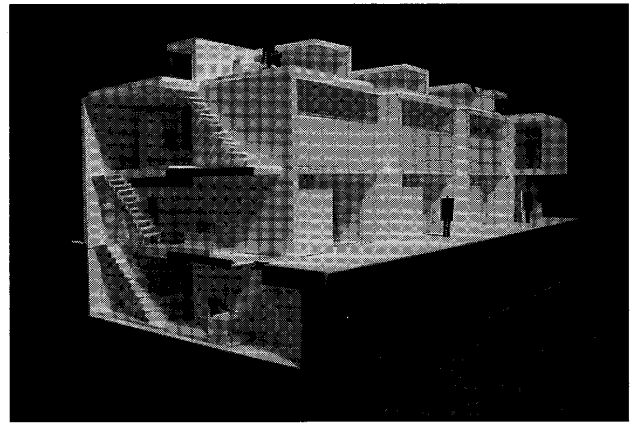


図15 異なった空間体験が可能になる4つのフロア

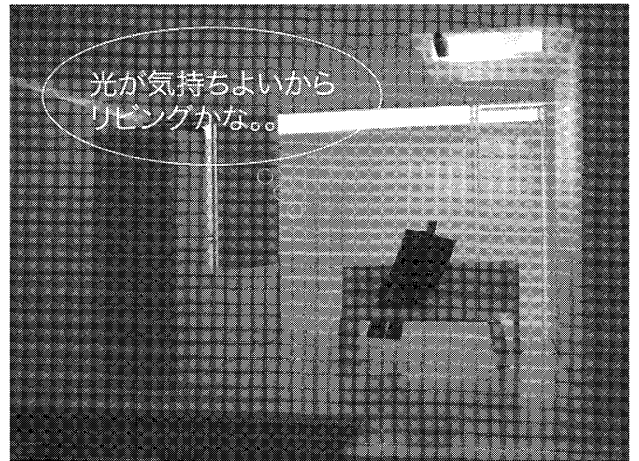


図16 大きなへや

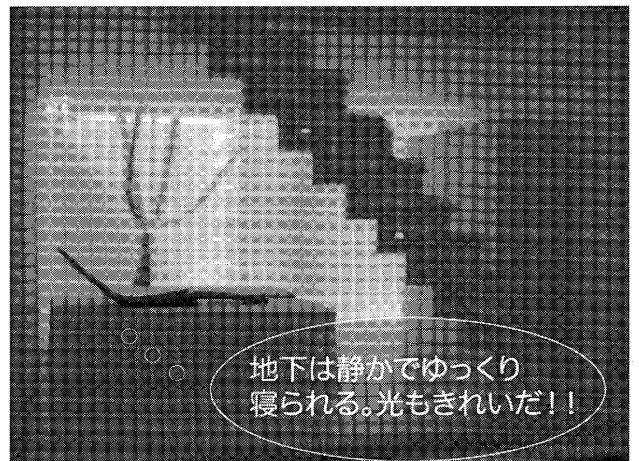


図17 別の大きなへや



図18 小さなへや



図19 いろんなへや

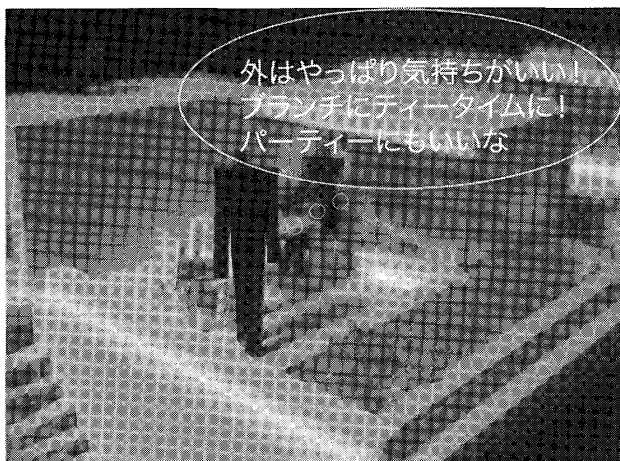


図20 別のいろんなへや~「ルーム・ソラ」

その時に、一般解として解いた住空間が、住空間本来の在り方であるそれぞれの特殊解に変わっていくと考える。それが可能になる空間構成が、今回の計画のポイントとなっている。

### 都市に住むということ

都市に住むということは、戸建て住宅に住もうと、集合住宅に住もうと、本来「集まって」住むということを表す。集まって住むということが、現代の都市の中でのそれぞれの家の集合が作り出す都市の多彩な表情を意味するのではなく、その敷地の分割の仕方、効率的な敷地の使い方の模索の問題になってしまっているところに問題があると考えられる。いわば、都市と敷地との間に何の脈絡を持たないことになってしまっている。共有空間のはみ出しを見ることが出来る路地空間をもつ住環境は未だに残っているが、それを郷愁ということからだけではなく、都市に住むための知恵として学び、その知恵を再利用することがこれからの住環境には大切なことであろうと考えている(図21)。

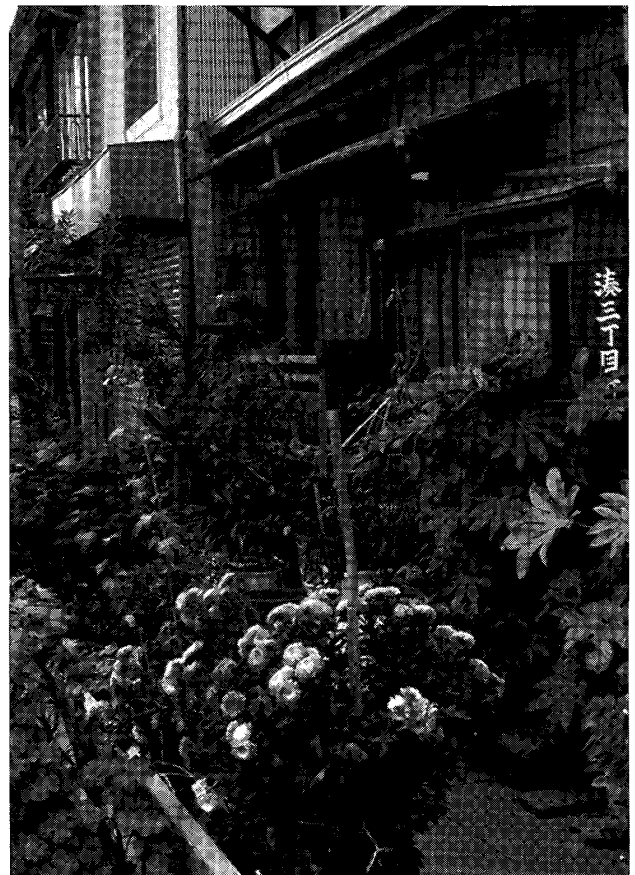


図21 佃島の路地空間

今回取り上げたプロジェクトは、8戸という少ない集合体であり、どのような住民が住まうのかがわからない分譲住宅として計画が始まっているが、筆者がその実践として実際の敷地の中で計画したものである。今後、居住者がその空間構成から計画意図を感じ取って、どのように住みこなしていくのかを見届けていきたいと思っている（図22）。

### プロジェクトの概要

所在地：東京都世田谷区上馬4丁目

敷地条件：第1種低層住居専用地域

第1種高度地区

準防火地域

日影規制 4時間/2.5時間 +1.5m

世田谷区みどりの基本条例

法定建蔽率 50%

法定容積率 100%

敷地面積：367.61㎡

建築概要：タウンハウス（長屋）8戸

駐車場 9台

駐輪場 1台/戸

構造・規模：鉄筋コンクリート造

地上2階/地下1階

建築面積：182.92㎡

建蔽率：49.75% < 50%

延床面積：546.95㎡

容積対象面積：364.63㎡

容積率：99.18% < 100%

設備概要：給排水設備・空調換気設備・衛生設備

電気設備・エコキュート設備

電話設備・インターホン設備

光ファイバー設備・CATV設備

機械駐車設備

注）今回事例として取り上げたプロジェクトは、ここ数年筆者が計画を続けている都市に住まい続けるための集合住宅のケーススタディの一環として2005年12月に開催された第9回都市プロポーザルコンペ（主催：キーワード株式会社）に応募し、86点の公募作品の中から最優秀賞となったものである。現在この計画案に基づいて建設が進められ、2007年1月下旬には竣工する予定である。



図22 都市に住むために～計画案